

# 水稻品種「彩のきずな」における減農薬・減化学肥料栽培法の開発

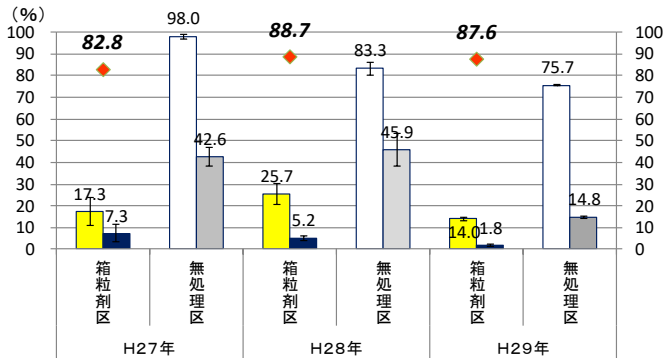
本県が育成した良食味・複合病害虫抵抗性品種「彩のきずな」は、「減農薬・減化学肥料栽培」の認証取得への高いニーズがあります。しかし、「紋枯病」に罹病しやすい弱点があるため、これに対応できる栽培技術を開発しました。この栽培技術は、慣行栽培と比較して収量も食味も同等でした。

## [減農薬・減化学肥料栽培技術]

- ①種子消毒：60℃15分間の温湯浸漬
- ②薬剤防除：箱施用薬剤「イミダクロプリド・イソチアニル・ペンフルフェン粒剤」  
本田除草剤「ピリミスルファン・フェントラザミド剤」
- ③施肥設計：6月下旬移植・10a当たり施用量  
有機アグレット666・58kg（窒素成分で3.5kg）  
BM 燐加安 A906・12.5kg（窒素成分で1.5kg）

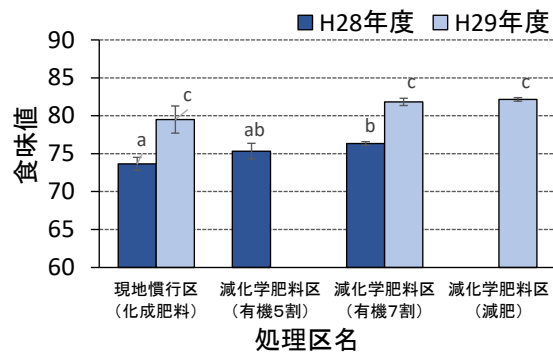
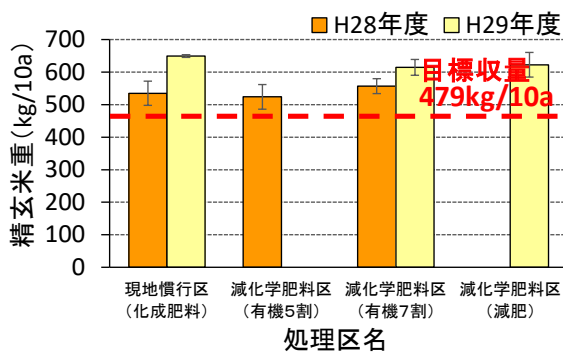


紋枯病の被害(葉鞘の病斑: 矢印 と株の枯上り)



各区の棒グラフ、左は発病株率・右は被害度、防除価はひし形のプロット(6月下旬植・場内)

## 長期残効を有する箱施用薬剤による紋枯病の防除効果



## 基本の施肥設計を応用した高地力ほ場における減化学肥料試験の結果

試験場所：本庄市児玉町 土壌の種類：灰色低地土(仁手統)

注) 各処理区の施肥設計 (10a当たりの窒素施用量)

- ①現地慣行区：基肥 化成肥料 (5kg)
- ②減化学肥料区 (有機5割)：基肥 有機質肥料 (2.5kg) + 化成肥料 (5kg)
- ③減化学肥料区 (有機7割)：基肥 有機質肥料 (3.5kg) + 化成肥料 (1.5kg)
- ④減化学肥料区 (減肥)：基肥 有機質肥料 (1.0) + 化成肥料 (3.0kg) ※全処理区について穂肥施用せず

このほ場は地力が高いため、上記の施肥設計で穂肥なしでも収量を確保できました。減化学肥料栽培の実施に当たっては、ほ場の地力に応じた増肥または減肥が必要です。